

## グループ討議 報告シート Aグループ

## ＜討議テーマA＞ 学部生全員を海外に派遣する枠組みの検討

長期ビジョンの「原則全員、学部1・2年次に1か月以上海外での生活を経験」の実現にむけて、「低学年次での海外経験を通じて、本学学生がどのように成長してほしいか」「課題（単位化・必修化、時期・期間等）や他の施策のアイデア」等について議論する。

※シートは適宜改行してご利用ください。

## A. 低学年次での海外経験を通じて、本学学生がどのように成長してほしいか

項目	内容
1. 具体的にどのような「人間力」を身につけてほしいか	<p>口を開けて餌を待つ学生ではなくて、自分で食べにいく学生になって欲しい。そして、それは海外経験を含め様々な経験によって培われていくのではない。</p> <p>企業から本学学生は積極性がない印象を持たれている。積極性を身につけるきっかけとなる可能性。外部との交流の拡大のきっかけ。</p> <p>非日常の苦労経験、刺激を通して、価値観の変化や対応力の向上</p>
2. 「どのような」マインドを「どのような」マインドに変えてほしいか	<p>日本から出て一歩目を踏み出すのを手助けする。英語研修+αからスタート</p> <p>点数至上主義からの脱却、真の実力が重要であることへの気付き。</p> <p>受け身から自発的に動いて自身の成長につなげる経験。</p> <p>状況打開、問題解決能力</p>

3. 海外経験の中で何を学んで欲しいか	外国人との交流への意欲、きっかけとして。それを通して自身の興味、選択肢を広げる。自国の価値を再認識。 いずれ外国で働くことも選択肢としてあり得る社会情勢。
---------------------	--

## B. 課題（単位化・必修化、時期・期間等）や他の施策に対するアイデア

項目	内容
1. 課題（単位化・必修化、時期・期間等）に関するご意見を教えてください。	<p>南山：外国語、国際教養学部。大学がプログラムを認定。3割程度は行っていない（代替プログラム）。徐々に拡大していく方向</p> <p>研究室で海外経験（学会発表、短期研究留学）に差がある。大学からの支援制度が必要。方法の議論。国際会議や修士学外実習のほうが伸びやすい。伸びやすいのは基本的に上位層。修士学外実習は行く前にセレクションが効いているのがうまく働いている。希望者からプログラムを拡大。学生を増やそうとすると、本人の意思がネック。現状で特定の学生が何度も行っている。本学の存在意義に対して、語学がどの程度ウエイトを持つか。</p> <p>1ヶ月の期間に限定すると、1, 2年の授業との兼ね合い。</p> <p>自発的に動いてもらうのが良いが、大人数だとトラブルが発生しやすい。現実的には業者に委託する方向。必修だと委託でも本学が何らかの責任を負う必要がある。本学では誰が窓口になるか？南山の派遣先は協定校メイン。</p> <p>サマーセミナーや他大学での交流を通して刺激を受ける本学学生もいる。海外へ行くことが本当に必要か？留学生受け入れを拡大することもオプション。とにかく交流を通して刺激を与えるきっかけにする。</p> <p>学生の自由時間を圧迫してしまう可能性もある。</p> <p>興味のない学生に対する対処？留学が積極性（できれば工学に絡んで）を身につけるきっかけとなれば良い。どの程度の達成度を求めるか？</p> <p>工学部の留学としては、修士以上での研究に絡んだ留学のほうが適している。将来の職につなが</p>

	<p>ればよい。</p> <p>コスパ、タイパの価値観から学生にどう響くか？</p> <p>ある程度長期の海外経験をさせる場合、卒業が半年程度遅れることへの対応が必要。対応の一例として、単位互換制度。</p> <p>どのレベルの学生に合わせて対処を議論するか？授業や学外実習でも苦勞しているのに現実的に全員行かせられるか？</p> <p>長期ビジョンの全体像と照らし合わせて今後の具体的な方針を点検する。</p> <p>学生の意思を1番重要視する。高学年を優先して、低学年へ拡大する方法を検討していく。</p> <p><b>*まとめ</b>  授業や学外実習でも苦勞している現状では低学年を全員一律に海外に送り、人間力の向上を期する体験をさせることは困難。まずどのレベルの学生に合わせてるか、長期ビジョンの全体像と照らし合わせて今後の具体的な方針を点検する。学生の意思を1番重視して、様々なプログラムへの個別派遣の拡大を検討するのが現状でより多くの学生に海外体験を受けさせる現実的な方策。学部の高学年や修士を優先（国際会議での発表、研究留学、インターン）して、低学年へ拡大する方法を検討していく。プログラムの拡大には学生に海外挑戦の自発的な意思を育てる方策も必要。海外経験を通じた成長にはある程度の自由が必要だが、リスクとの兼ね合いも検討する必要がある。</p>
2. 派遣先確保のため、他の施策のアイデアがありましたら教えてください。	<p>長期的（15年）には、提携校を増やし、先方に留学して単位やダブルディグリーを取得ができるようにする（参考：南山大学）。</p> <p>海外でのトヨタ自動車の研修先の検討</p> <p>語学+<math>\alpha</math>の留学先も検討（現在、探している）。</p> <p>できるだけ業者だけで完結できるプログラムを検討する。</p>

\*ただし、費用や安全面等の観点から、実現できない場合もございます。予めご承知おきください。

## グループ討議 報告シート Bグループ

## &lt;討議テーマA&gt; 学部生全員を海外に派遣する枠組みの検討

長期ビジョンの「原則全員、学部1・2年次に1か月以上海外での生活を経験」の実現にむけて、「低学年次での海外経験を通じて、本学学生がどのように成長してほしいか」「課題（単位化・必修化、時期・期間等）や他の施策のアイデア」等について議論する。

※シートは適宜改行してご利用ください。

## A. 低学年次での海外経験を通じて、本学学生がどのように成長してほしいか

項目	内容
1. 具体的にどのような「人間力」を身につけてほしいか	適応力・柔軟性、自立性・自己管理能力、コミュニケーション能力、問題解決能力、異文化理解・寛容性、レジリエンス、自己認識・アイデンティティ、チームワーク・協調性、創造性・イノベーション力、責任感・倫理観
2. 「どのような」マインドを「どのような」マインドに変えてほしいか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ぬるま湯の学生記気質をチャレンジングな意識に変えたい。</li> <li>・自己責任への意識改革。</li> <li>① 受動的学習態度 → 主体的・能動的な学習姿勢 <ul style="list-style-type: none"> <li>・自ら課題を見つけ、解決策を探る姿勢の育成</li> <li>・継続的な自己学習と知識更新の重要性の認識</li> </ul> </li> <li>② リスク回避傾向 → 挑戦精神と積極性 <ul style="list-style-type: none"> <li>・新技術や未知の分野への挑戦を恐れない態度</li> <li>・イノベーションを生み出すための積極的な姿勢</li> </ul> </li> <li>③ 完璧主義 → 試行錯誤を恐れない姿勢 <ul style="list-style-type: none"> <li>・プロトタイプと迅速な改善サイクルの重視</li> <li>・失敗を学びの機会として捉える態度</li> </ul> </li> <li>④ 専門分野への固執 → 学際的・複合的な知識習得への意欲 <ul style="list-style-type: none"> <li>・異分野との融合による新しい技術開発の可能性の認識</li> <li>・幅広い知識を活用した問題解決能力の育成</li> </ul> </li> <li>⑤ 国内志向 → 国際的な視野と活躍の場の拡大 <ul style="list-style-type: none"> <li>・グローバルな技術標準や市場動向への関心</li> <li>・国際的な研究開発チームでの協働能力の向上</li> </ul> </li> <li>⑥ 言語コンプレックス → 言語を道具として捉える実用主義 <ul style="list-style-type: none"> <li>・技術英語の積極的な使用と国際会議での発表スキルの向上</li> </ul> </li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>多言語環境での技術コミュニケーション能力の育成</li> </ul> <p>⑦ 集団同調性 → 個性の尊重と自己主張</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>独創的なアイデアを生み出し、提案する勇氣</li> <li>多様な意見を尊重しながら自己の視点を主張する能力</li> </ul>
3. 海外経験の中で何を学んで欲しいか	<ul style="list-style-type: none"> <li>海外の学生と接して、意識の高さを学んでほしい。</li> </ul>

## B. 課題（単位化・必修化、時期・期間 等）や他の施策に対するアイデア

項目	内容
1. 課題（単位化・必修化、時期・期間 等）に関するご意見を教えてください。	<ul style="list-style-type: none"> <li>費用負担（全額費用補助が望ましい）←実質学費値上げにならないようにする</li> <li>英語力：幼稚園からしっかり学んでいる学生が今後増えるため、学生格差がより大きくなる。</li> <li>レベル分けが必要（例：3コースのレベル分け） <ul style="list-style-type: none"> <li>① 上級：インターンコース（ただし、個別対応の難易度があがる）</li> <li>② 中級：海外大学経験コース</li> <li>③ 初級：海外生活体験コース</li> </ul> </li> <li>滞在：部屋の借り方：1～2ヶ月での借用は困難</li> <li>事務工数・教員の工数が多大になる→エージェントまたは担当者が必要</li> <li>セキュリティ・安全管理が課題</li> </ul>
2. 派遣先確保のため、他の施策のアイデアがありましたら教えてください。	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎海外のインターン（トヨタの海外工場実習がまだあれば。学外実習の海外版（要選抜））</li> <li>◎学外実習1を海外派遣に一部移行（業者に依頼する案もあり）</li> <li>・ボランティア（業者のパッケージがある）：住居：NPO, ホテル住まい、ホームステイ</li> <li>・千葉大学の留学プログラムが参考（オンラインプログラムもあり）←危機管理は自己責任</li> <li>・海外派遣プログラムの中に以下のような要素を組み込むことが効果的 <ul style="list-style-type: none"> <li>① 国際的な企業や研究機関でのインターンシップ</li> <li>② 多国籍チームでの協働プロジェクト</li> <li>③ 海外の先端技術施設や研究所への訪問</li> <li>④ グローバルな技術課題に取り組むハッカソンやコンペティションへの参加</li> <li>⑤ 現地の学生や技術者とのメンタリングプログラム</li> </ul> </li> </ul>

\*ただし、費用や安全面等の観点から、実現できない場合もございます。予めご承知おきください。

## グループ討議 報告シート Cグループ

## &lt;討議テーマA&gt; 学部生全員を海外に派遣する枠組みの検討

長期ビジョンの「原則全員、学部1・2年次に1か月以上海外での生活を経験」の実現にむけて、「低学年次での海外経験を通じて、本学学生がどのように成長してほしいか」「課題（単位化・必修化、時期・期間等）や他の施策のアイデア」等について議論する。

※シートは適宜改行してご利用ください。

## A. 低学年次での海外経験を通じて、本学学生がどのように成長してほしいか

項目	内容
1. 具体的にどのような「人間力」を身につけてほしいか	<ul style="list-style-type: none"> <li>○レベルに応じた人間力、プログラムを準備したい。</li> <li>・英語力、意欲ある学生は学問的な（専門的）知識。</li> <li>・意欲（動機付け）を与える機会に。</li> <li>・ない学生にはハードルを下げる。</li> <li>○自分でプログラムを見つける、企画させる（主体的な学びにも）。</li> <li>○視野を広げる。</li> </ul>
2. 「どのような」マインドを「どのような」マインドに変えてほしいか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ブルゴーニュからの留学生（修士）の受け入れている（4か月）（意欲的）。日本の学生も出ていけるはず。（専門を学ぶ場合は3年生以上か。）</li> <li>○学生の意識改革こそが必要（全ての基本）。</li> <li>・能動的、主体的なマインド必要。</li> <li>・特に、上位30%以下の学生の意識改革が重要だが、難しい。</li> </ul>
3. 海外経験の中で何を学んで欲しいか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まず体験、多様性を感じる（将来の専門性への準備）。</li> <li>・キャリア形成にどのように役にたつかを考える必要性あり。</li> <li>・非日常の経験を。海外の空気。</li> <li>・英語力の必要性。</li> </ul>

## B. 課題（単位化・必修化、時期・期間等）や他の施策に対するアイデア

項目	内容
1. 課題（単位化・必修化、時期・期間等）に関するご意見を教えてください。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○安全性： <ul style="list-style-type: none"> <li>・確保は最重要</li> <li>・不安全な経験も良い経験になることもある。</li> </ul> </li> <li>○派遣先（プログラム）： <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学補助の海外英語演習（UC デービス、マレーシア、フィリピン）はあるが、新たなプログラムも</li> </ul> </li> </ul>

	<p>検討も必要。教員の体制（人数）の課題もあり。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・オーストラリア、アイルランドも検討中</li> <li>・自分で見つけさせてもよい。</li> <li>・エージェントを使う。</li> </ul> <p>○費用の問題（米国 100 万円、アジア 50 万円）：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・希望制は良いが、強制するのは問題。</li> <li>・大学からのサポート必要。</li> <li>・学生からの一部負担は必要。</li> <li>・31名海外演習演習（JASSO から 10 名程度）、法人からの補助もあり（給付 15 万円/人（米国）、10 万円/人（アジア）、E-sup 助成もあり。</li> <li>・株の配当益を利用できないか（博士は既に助成対象、不安定な原資、研究費とのバランス）。</li> <li>・派遣先が費用負担のプログラムもあり（大学が情報収集、開示の大学もあり）。本学でもそうしたい。</li> <li>・企業支援に資金的なお願いもできる（冠スポンサーになってもらう、ユニフォームにロゴ）。</li> </ul> <p>○単位化：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・千葉大は全員対象（多様な代替プログラム準備して対応）。本学も可能ではないか。</li> <li>・全員の単位化は難しいかも。             <ul style="list-style-type: none"> <li>・E-SUP ポイントの要件を上げて、海外留学は高ポイントに。</li> <li>・単位化はしないが、卒業要件に入れる。</li> <li>・まずは卒業要件からスタートし、その後、単位化の検討へ。</li> </ul> </li> </ul> <p>○意識改革：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・海外へ行かせる前の意識改革が必要</li> <li>・特に、上位 30%以下の意識の低い学生をどうするかが課題。</li> <li>・若い方が海外への柔軟性あり。</li> </ul>
<p>2. 派遣先確保のため、他の施策のアイデアがありましたら教えてください。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・完璧なプログラムではなくても、出来ることから始める。</li> <li>・国内留学も含める（北海道ニセコ、沖縄、米軍基地、外国人家庭）、エージェント利用。</li> <li>・バックパッカーも可能とする（レポート課す、安全性の問題）。</li> <li>・学生に自分でプログラムを見つけてさせる（能動的、主体的）。</li> <li>・ワーキングホリデー制度も利用可能では。</li> </ul>

\*ただし、費用や安全面等の観点から、実現できない場合もございます。予めご承知おきください。

グループ討議 報告シート Dグループ

<討議テーマA> 学部生全員を海外に派遣する枠組みの検討

長期ビジョンの「原則全員、学部1・2年次に1か月以上海外での生活を経験」の実現にむけて、「低学年次での海外経験を通じて、本学学生がどのように成長してほしいか」「課題（単位化・必修化、時期・期間等）や他の施策のアイデア」等について議論する。  
 ※シートは適宜改行してご利用ください。

A. 低学年次での海外経験を通じて、本学学生がどのように成長してほしいか

項目	内容
1. 具体的にどのような「人間力」を身につけてほしいか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海外に対して抵抗のないたくましいマインド（全体の中での位置づけ、マイルストーン）。</li> <li>・英語力、コミュニケーション力、人脈、異文化理解。</li> </ul>
2. 「どのような」マインドを「どのような」マインドに変えてほしいか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海外に対するハードルを下げる、将来に海外へ目を向ける意識を醸成する。</li> </ul> <p>⇒次世代国際産業リーダーの育成</p>
3. 海外経験の中で何を学んで欲しいか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・語学＋α</li> <li>日本の良いところ再発見、もっと日本のことをよく知る（自分のこと、自分の国、自国の文化を知る）。</li> <li>外国の文化や多様性。</li> <li>最後の1週間は自分で行動企画を立案してレポート提出により、経験と行動力をつける取り組みなどもある（自分で考え、やり切る経験）。</li> </ul>

B. 課題（単位化・必修化、時期・期間等）や他の施策に対するアイデア

項目	内容
1. 課題（単位化・必修化、時期・期間等）に関するご意見を教えてください。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・必修にすると大学に責任が発生（希望者にし、それ以外は代替プログラムで対応）。</li> <li>・4週間が良いのか？（費用と目的の兼ね合い）、期間については目的とバランスが必要。</li> <li>・学生の社会経験を尊重するにあたり、夏休み春休みがこれ以上つぶれることに懸念（病む人もいる、学祭できなくなる）。休みや課外活動などとの兼ね合いも考慮を。</li> <li>・時期的な検討として、夏でも春でも年間を通じて自由な時期に実施できるようにする、3年生の後期でも良いのでは。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"><li>・ どのレベルの学生をターゲットにするのか。</li><li>・ 費用についても大学が負担なり補助する制度を考える必要あり。</li></ul>
2. 派遣先確保のため、他の施策のアイデアがありましたら教えてください。	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 語学研修（フィリピン、マレーシアなどの）をバージョンアップさせる</li><li>・ 協定大学の活用。</li><li>・ 以前はトヨタ G 駐在員先へのホームステイの仕組みがあったらしい。</li></ul>

\*ただし、費用や安全面等の観点から、実現できない場合もございます。予めご承知おきください。

## グループ討議 報告シート Eグループ

## &lt;討議テーマA&gt; 学部生全員を海外に派遣する枠組みの検討

長期ビジョンの「原則全員、学部1・2年次に1か月以上海外での生活を経験」の実現にむけて、「低学年次での海外経験を通じて、本学学生がどのように成長してほしいか」「課題（単位化・必修化、時期・期間等）や他の施策のアイデア」等について議論する。  
※シートは適宜改行してご利用ください。

## A. 低学年次での海外経験を通じて、本学学生がどのように成長してほしいか

項目	内容
1. 具体的にどのような「人間力」を身につけてほしいか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 広い視野をもつ能力</li> <li>・ コミュニケーション力</li> <li>・ サバイバル力</li> <li>・ トモダチ・知り合いを作るチカラ</li> <li>・ <b>みずから一歩踏み出す力。はじめの一歩の度胸</b></li> <li>・ 自立性の育成</li> </ul>
2. 「どのような」マインドを「どのような」マインドに変えてほしいか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ クローズドマインドをオープンマインドへ</li> <li>・ 画一化した思考からヒトそれぞれ多様な思考へ</li> </ul>
3. 海外経験の中で何を学んで欲しいか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 知らない環境に身を置く。経験を活かさない環境で、自分で考えて適応する</li> <li>・ 発信するための語学力。持っている語学力でのりきる（なので、個人で活動してほしい。グループではなく）</li> <li>・ 各地の文化を理解。文化や思考の違い（ex 語学の文法から相手の思考の違いに気づくこと）</li> <li>・ トラブルなど突発に対する対応、応変</li> </ul>

## B. 課題（単位化・必修化、時期・期間等）や他の施策に対するアイデア

項目	内容
1. 課題（単位化・必修化、時期・期間等）に関するご意見を教えてください。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 海外経験必須にした時の入学者確保</li> <li>・ <b>意欲の差に対するケア。海外渡航（環境の大きな変化）に心理的不安が強い学生への配慮</b></li> <li>・ <b>実施のタイミング（低学年 or 高学年）→低学年で行く時に意味を持って枠組みを検討すべき・・</b></li> <li>・ 最適な時期、それぞれに合った内容</li> <li>・ <b>サポート（事務、金銭、人的面、など）</b></li> <li>・ アクティブチャレンジなど他の活動との兼ね合い</li> </ul>

2. 派遣先確保のため、他の施策のアイデアがありましたら教えてください。	<ul style="list-style-type: none"><li>・コーディネーターの確保</li><li>・旅行代理店、NPO?</li><li>・他大学との連携</li></ul>
--------------------------------------	---

\*ただし、費用や安全面等の観点から、実現できない場合もございます。予めご承知おきください。

## グループ討議 報告シート Fグループ

## ＜討議テーマA＞ 学部生全員を海外に派遣する枠組みの検討

長期ビジョンの「原則全員、学部1・2年次に1か月以上海外での生活を経験」の実現にむけて、「低学年次での海外経験を通じて、本学学生がどのように成長してほしいか」「課題（単位化・必修化、時期・期間等）や他の施策のアイデア」等について議論する。

※シートは適宜改行してご利用ください。

## A. 低学年次での海外経験を通じて、本学学生がどのように成長してほしいか

項目	内容
1. 具体的にどのような「人間力」を身につけてほしいか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初めての海外経験になる可能性が高い。何を学ばせるとかあまり深く考えすぎない方がいいかも。受け身の学生を放り出す。経験させることが重要との考え方もある。</li> <li>・飛び込んでいく意欲（受け身の学生が多い）（香港理工大学の学生の意欲的な事例）</li> <li>・トラブル・イレギュラーが生じたときの問題解決力、自立する機会</li> <li>・新しい環境に適応できる能力</li> <li>・事前の情報収集能力が必須</li> <li>・語学が障壁になるようなプログラムでなくてもいいのではないかと。逆に英語圏にこだわらなくてもいいのではないかと。（E-SUPポイントとの関係を検討）</li> </ul>
2. 「どのような」マインドを「どのような」マインドに変えてほしいか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いろいろな意味で視野を広げてほしい</li> <li>・自分で計画をして、主体的に動く面白いことができることに気付いてほしい</li> <li>・第一志望の大学に落ちて本学に入学した学生に対して、海外に行った結果、ここでも面白いことができそうだとマインドチェンジしてほしい。偏差値だけで大学をみない。（日本の価値観とは異なる価値観に触れることで、自己肯定感の向上）</li> </ul>
3. 海外経験の中で何を学んでほしいか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海外の人からの刺激を受けてきてほしい 旅行的なプログラムよりも、何かのサークルの中に入っていき方がコミュニケーションの敷居が下がる。友人も作りやすい。例えば海外のロボコン、プログラミング、ボランティア。低学年なので研究ではない何か。</li> <li>・海外のいい面、悪い面を実際に見る（反面として日本の良さと課題）</li> <li>・アジア圏の経済成長している実感、こういう人たちと自分が将来的に仲間あるいはライバルになることを感じてほしい。</li> <li>・五感のすべての刺激から何かを学んできてもらいものはあり得る。海外で飲んだ水の味が、将来の就職活動に役立った学生がいた。</li> </ul>

**B. 課題（単位化・必修化、時期・期間 等）や他の施策に対するアイデア**

項目	内容
<p>1. 課題（単位化・必修化、時期・期間等）に関するご意見を教えてください。</p>	<p><b>【単位化】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・単位化は難しいか。E-SUP ポイント、ポイントであれば代替プログラムでの運用もしやすい。学生は単位が欲しいわけではないのではないか。海外の経験がしたいのではないか。</li> <li>・単位化、必修化に関しては賛否両論。受け身の学生に行ってもらうためには必修はいいが。行きたくない（あるいは行けない）人に対してはどうか。</li> </ul> <p><b>【時期・期間】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生の行く時期、期間（初めての海外経験として <b>1 か月は適切か</b>どうか、長くないか）</li> </ul> <p><b>【金銭面】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・金銭面の支援（千葉大学は全員留学にしたタイミングで <b>授業料を 10 万円値上げ</b>。4 年間で 40 万円の計算）</li> <li>・とりあえず海外経験を積んでほしいという趣旨で、海外旅行（ツアーは除く）でも、20 万円（？）の助成金（サポート）を出す。（北海道大学）</li> </ul> <p><b>【方法、安全性など】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・先生が引率するのは狙いから外れる。一方でトラブル対応も必要。ケアの方法を検討。</li> <li>・1 人で行くのもいいが、3・4 人くらいの少人数で計画して行くのもひとつ</li> <li>・親が海外留学してプラスな経験を得て帰っていると、子供にも薦めると思う。（親を籠絡）</li> <li>・事前学習（予習）のアイデアの一つに日本（愛知県）のことを海外の人に紹介するためのプレゼン</li> </ul>
<p>2. 派遣先確保のため、他の施策のアイデアがありましたら教えてください。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生自身が行きたい場所を探して大学に提案して、良いものは採用してメニューに入れる。</li> <li>・<b>海外の大学（協定校）の集中講義</b>に参加、加えて交流にも参加。</li> <li>・海外ボランティアをあっせんしてくれる <b>業者を活用</b>する手もある（千葉大も活用している）ただし、業者がつぶれたらプログラムが白紙になってしまうので注意が必要</li> <li>・世界中から学部学生が集まって行う、何かの大会に参加する（iGEM, BIOMOD、プログラミング）</li> <li>・アメリカのサマーキャンププログラム</li> <li>・疑似体験として日本の中で海外の人がいっぱいいるところ。</li> </ul>

\*ただし、費用や安全面等の観点から、実現できない場合もございます。予めご承知おきください。

## 2024 年度教育談話会討議まとめ 【テーマ B】 教員と学生に「時間を返す」ための諸施策について

### ▼教員に「時間を返す」ための諸施策について

新中期プランでは「教員が教育と研究に専心できる時間確保」という方向性が掲げられている。具体的には、教育・研究を支援するサポートスタッフの体制強化、大学運営業務、会議時間の大幅削減が2大項目になっている。これらについて問題点、要望、改善策について議論する。

### 1. 教育・研究を支援するサポートスタッフの体制強化

意見まとめ

#### ▼共通設備の維持管理

- ・ 共通基盤の装置（クリーンルーム、分析装置など）を維持管理、技術支援するスタッフ
- ・ 共通計算サーバーの設備だけでなく、管理者もいないと時間短縮に繋がらない。
- ・ 共通機器などのメンテナンス、研究センター等において、技術的な面もカバーする事務スタッフがいるとよい（スタッフは、時間がある場合、自分のスキルアップを行ってもよい）
- ・ シニア人材が採用できるとよい。
- ・ 機器に精通していなくても、窓口対応をするスタッフでも効果的
- ・ 学生アルバイトを、実験装置の維持管理に活用できないか。⇒実験装置の共有を促進して、維持管理・装置操作のマニュアル作成も学生がやることで、学生の教育にもなる。
- ・ 分析などの共通事項のスペシャリストスタッフを雇って関係する研究する研究室でお願いするのはどうか。⇒一部の研究室だけが利益を得る事にならないか。
- ・ 研究業績データベースへの入力負担（Researchmap との連携はよいが、エラーチェック・手入力等も必要）

#### ▼教育関係

- ・ 大人数の実験 兼 装置管理に技官をつけて、実験準備後片付け（廃液処理）や装置の世話（業者対応含む）もお願いしたい。
- ・ 実験の授業の効率化（授業数は許容範囲）
- ・ 実験/教育補助スタッフ（装置の使い方を学生に教えてくれるスタッフ）
- ・ 技官/メンテナンス：学部卒で経験を有している人
- ・ 実験等の評価を効率よく行う方法はないだろうか？  
⇒実験に教員が立ち会う時間をどうするか  
⇒考えさせるためには評価で諮問をする必要があるが時間が必要になる。
- ・ 実験の評価・レポート・諮問等のやり方など各教員のベストプラクティスについて情報共有をする。
- ・ レポートを提出しなくてもいい実験をつくる（レポートテーマを厳選する：どの部分を教育するかのメリハリをつける：教員の中でまわす）例えば工学基礎実験
- ・ ライティングスタッフ（文章を専門にコメントしてくれるスタッフ/センター）
- ・ TA 制度の緩やかな利用ができるようにしてほしい

<p>⇒必要な時間に利用できるように手順の簡略化ができるとうい</p> <p>⇒前年 TA が次の TA に引継ぎする際の時間にも給与を支払う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 社会人の補講の今後の運営体制維持のため、スタッフが必要では (TA の確保等)</li> <li>・ Google Classroom に掲載されている授業評価・合格一覧、成績評価開示など、事務の効率化を行っていくことで、新たな改善に取り組める時間ができる。</li> </ul>
<p>▼採用関係</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 助教の採用。セーフティネット (例: 1 回更新あり、任期 5 年として 3 年目に中間審査、等) を用意する。実験関係を担当する教授、准教授の負荷が軽減される。</li> <li>・ 若手教員のキャリア支援を十分に考慮 (研究者の循環)</li> <li>・ 本学の優秀な学生に対して、アカデミアへの道 (博士課程に進学、研究員・助教で雇用) をすすめる。⇒研究者の循環により、本学の宣伝にもなる</li> <li>・ 優秀な教員・研究員確保のための給与体制</li> <li>・ ユニット制の人数確保。特任教員は 60 人体制の外数にする (学生指導の負担考慮)</li> <li>・ 特任教授という貴重な人的リソースを活用させていただく。</li> <li>・ たまに発生する系で共通の仕事 (シンポジウム) を引き受けてくる人員、仕組み。</li> <li>・ 大学全体のファシリティ (クリーンルーム等) のスタッフ職員を増員</li> <li>・ DX ができる (簡単なツールが作れる) スタッフを雇用する。</li> <li>・ アカデミックアドバイザーのサポートスタッフがあっても良いのでは。実際、テクニックや知見はない。成績不良やメンタルのサポート体制を強化 (カウンセラーからの情報共有や連携、第三者的視点が持てる立場)。負荷が減り時間も確保でき、みんながハッピーにつながる。</li> <li>・ 大学全体として、合理的配慮が必要な学生に対するサポートスタッフの充実が必要。</li> <li>・ 合理的配慮が必要な学生が研究室に配属されたら、サポートスタッフをつけてほしい。(1 つの研究室ではなく、分野で面倒をみることも必要か。)</li> </ul>
<p>▼その他</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 出張の手配・申請 (かつて業者に依頼をしたら、業者から事務に回してくれていた。</li> <li>・ 国立大と比べると、事務職員はよく働いてくれている。</li> </ul>

## 2. 大学運營業務、会議時間の大幅削減

意見まとめ
<p>▼会議の運用について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 何かを決めたいのか会議なのか、意見交換 (雑談) のための会議なのか? 決定権のない会議 (教室会議など) の必要性はあるのか。決定権のない懇談会の常設をやめ、メールでの報告に移行する。(昔の系会議 (教室会議) は必要性があって復活したのか?)</li> <li>・ 退学、休学したい学生を教員会議で審議する必要性? (学則を変える必要がある。)</li> <li>・ 点検疲れ (チェックしすぎ) の感がある。各員会等に権限移譲しているものは任せる。</li> <li>・ 意思決定について、全員が同じパワーで参加するのではなく、ある程度委任することで負担軽減が可能。</li> <li>・ 意思決定プロセスのメンバーが重複している場合の効率化を検討</li> <li>・ 会議の構成員の人数を減らす。(例えば、博士課程委員会の構成員等)</li> <li>・ 1 つの委員会の構成員数を減らす (少人数のサブグループで意見をまとめる)</li> <li>・ 会議を減らすと、委員長に負担が集中する可能性がある。ワーキンググループや入試業務なども含めて、全体で仕事量を把握、管理する人が必要。</li> </ul>

- ・会議中に資料を読んでチェックは時間がかかるため、会議前に確認してすぐに審議に入る。
- ・会議時間の設定を短くする。(例：標準 1.5h⇒1h)
- ・会議を年度初めに相談をしてリストラする(ほっておくと増える)。
- ・似たような協議会、会議(工房、クリーンルーム等、要摘出)を合流させる。
- ・委員長負担を公平にするため、任期を決めて、平準化する。(2年、前後を考える必要性あり)→負担の集中を避け、平準化する。互いに委員長になる可能性をもって互いの仕事を知る。
- ・教員の業務負担が偏っている。委員長・構成員はローテーションで回していったらどうか。
- ・運營業務が特定の教員に集中しすぎている(事務局内で教員への依頼事項を共有する)。
- ・書面審議を増やす(ただし、準備時間は対面も書面も同じ点に注意。対面開催時間しかカウントされていない、書面審議や事前裁きはカウントされていない。)
- ・書面審議をより簡単にする(メール審議でのメール返信が時間を取られる、Google フォーム、チャットの活用)
- ・各会議は報告事項だけであれば書面審議だけでいいのではないか。
- ・slack 等で効率よく意見交換できるもの等で会議の時間を軽減する。
- ・オンライン会議を有効に活用する。
- ・審議結果の議事録のテンプレートを作成する(審議結果(承認・否決)、持ち越し、条件付きなど)
- ・研究センターの運営を管理する事務スタッフをつける(運営面での教員の作業が軽減される)
- ・所属委員会の希望調査をしても十分反映されず、調査時間が無駄になっている。
- ・専任教員会議が長すぎる(委員会の報告などいらぬのではないか)。  
⇒専任教員会議は時間を区切って厳守してもらいたい(開催時間内で実施してもらいたい)  
⇒専任教員会議の「話題」は書面 or 録画でいいのではないか  
⇒意見があればメール等で委員長または事務局へ

#### ▼入試業務

- ・入試の作問にあたり、明確なガイドラインが提示されていない。入試会議が無駄に長い。ここ3年入試の種類が増え、委員会で全問題のチェックが追い付かない。
- ・時間を厳守する時間運営。チェックの外注。事前にガイドライン、コンセンサスを作って効率化を図る。
- ・募集要項の文言チェックは教員が担当すべきか？事務に移行。
- ・入試委員会は作問チェックで時間がかかる。専門に近い先生でチェックをしてはどうか。

#### ▼その他

- ・学生を手厚くサポートし過ぎであり、少し放任をした方が、学生は自分で考えて自ら育ち、教員も学生も時間が確保できる。(履修登録等、教員がチェックし過ぎであり、学生が自分で考えるべき。低学年では手厚くしても、高学年で自立させる。)
- ・アドバイザー制(毎年)やコモンカフェなどの実行方法。履修登録まで一緒に考える必要があるのか。学生フォロー、オフィスアワー対応時間をまとめたい。
- ・研究室配属後、急に来なくなる学生への対応方法。研究と健康のバランスを考慮したアドバイスができる人。マニュアルは難しい。本当に病気か作戦か個別対応になるので、専門知識を持って対応できる人が必要。
- ・100分授業で14回に減らす。
- ・事務職員の時間確保も重要である。教員の時間確保と連動している。
- ・事務手続き、書類の電子化のさらなる促進。電子化システムの統合化、生成AIの活用

- ・メールのフォーマット・ルールの統一化 →件名【要返信】【要確認】、カレンダー設定
- ・重複依頼などを減らし情報共有を強化する（名簿の管理、設備予約と空調）
- ・プロジェクト管理ツールを導入することもあるが、形骸化の可能性もある。
- ・文科省の方針にどこまで対応するか。本学は完璧に対応しようとしがち。

### ▼学生に「時間を返す」ための諸施策について

長期ビジョンに掲げた「豊田工大メソッド」実現のため、新中期プランでは、学生に「深く考える学修」を実践するための環境整備を目標に掲げている。課題の負担等も含め、学生が何に負担を感じているのかを整理し、学生に「時間を返す」施策について議論する。

### 1. 学生の負担に関する整理

#### 意見まとめ

#### ▼時間の使い方

- ・時間の使い方を教育する必要がある。ただし課題にいかにかエネルギーをかけずにやるか（作業）になると本末転倒
- ・時間のない学生とは・・・？
  - ＞上位層については現在のカリキュラムでさほど負担ではないのでは？
  - ＞配慮しても時間を有効に使えない学生が多いのでは？（一部の学生の声が大きい？）
  - ＞単純作業の課題ではなく、考えないと書けない課題を出すべき。
  - ＞予習・授業・復習に学生の目が届いていないことにより、補填するために課題を出すという状態。
- ・実験のレポートについて、すぐに手をつければよいが、~~メ~~切ギリギリにやるため、かえって大変になっている。

#### ▼課題等の負担

- ・アンケート結果の勉強時間はそれほど多くはない。講義の空コマが少なく、授業スケジュールが詰まり過ぎていないか。（講義に対する単位数が過小評価されていないか？）
- ・レポート、課題が多い（4月、5月ごろ）。⇒一応、減らしてきている。ただし、本学は1年生に集中している。
- ・化学実験の予習レポートは大変だと思うが、結果は事象を書くだけなのでそれほど時間はかからないと思う。
- ・学生レベルにより負担感が異なる。→できる学生はもっとやりたいと思っているが、困難をもつ学生は多いと感じる。
- ・実験レポートの負担よりも、講義科目の宿題が負担になっている。
- ・レポートの重なりを考慮する？ 他の課題の量までコントロールできない。学生自身がコントロールするべき。
- ・各科目ではなく全授業のレポート/課題の学生負荷を教務委員会が主導して全教員が共有・連携する仕組みを考える。
- ・1年次は実験科目が多く、ゆっくり考える時間がない。
- ・学問体系の面白さが生まれてくるプロセスに至るまでが難しい。
  - 面白くなれば負担ではないが、下地作りが重要。ある程度できるようにならないと面白さが感じられない
- ・フィードバックを返してもフィードバックを活用しきれていない →1 単位科目で早くに成績が確認できる科目を作る

#### ▼その他

- ・工学スタートアップセミナーの位置づけと効果の検証が必要。
- ・1 学期/2 学期の授業構成を変えて、学びの形態に対するパターンを学ぶ
- ・オフィスアワー面談の実施方法（時期、回数、希望制）。第一回履修変更までに面談。教員は学会、帰省学生もいる。

- ・学生の海外派遣を増やすと、学生の負担は増える。
- ・他大学よりは夏休みや春休みが少なくなっている。(一方で学生の要望に副いすぎる必要はない)(定期的に評価基準や試験内容を変える)
- ・工学部の学生は基本的にどの国も忙しい
- ・米国の大学の例：科目数が少ないため、一つの科目について考える時間がある
- ・中国の大学の例：学部レポートはなく、殆ど試験。(計算問題等の宿題はある) 実験は、2, 3 週間で集中して実施。レポートは A4 1 枚。感想を書くなどであまり重くない。レポート作成よりも実験に携わる時間を重視。)

## 2. 学生に時間を返すための施策について

### 意見まとめ

#### ▼課題

- ・実験レポートの指導の工夫 (例①プレレポをしっかりと書かせて、本レポを簡略化。②実験方法等は書かなくて良いから、データの整理と考察を書かせる。)
- ・レポート/課題の提出時期を定期試験等にかぶらないように設定する (学生にヒアリングするのも効果的)。
- ・負荷の高いレポート教科の時期をずらして平準化する方法を考える。
- ・授業の中でレポートを作成する時間を確保し、完結させる。
- ・記憶や効率性の観点からも、授業実施日にレポート作成するように指導する。
- ・実験/実習で情報共有 (連携) をしてトータルとしてレポートの削減 (半減) をすべき。
- ・物理実験、化学実験のレポート周期を変えるというよりも、通常の授業の宿題量を検討したい。
- ・教員職員間で、宿題のスケジュールや試験日程の共有ができないか。
- ・課題を任意提出にする (一部の学生はきちんとおこなっている) そこから中間試験を出題している。それがわかれば自主的にやる学生も増えるか?
- ・単位取得の最低限レベルの課題の設定をしたうえで、次のレベルの課題にも取り組めるような課題の設定をすることで、学力・モチベーションレベルの違いに対応する (ただし、採点の TA のレベルや負担も大きい)。
- ・評価に使わないプリントを学生に渡し、任意にする。ただ、そこから定期試験がでるのでやる事になる。

#### ▼カリキュラム・時間割

- ・学年ごとの履修を平滑化、もう少し授業を分散させることはできないか。時間割の再検討、週 2 回クォーター授業。授業中の宿題を減らせる。
- ・100 分授業で 14 回に減らして休みを増やす。学期開始を遅らせる or 祝日には休む。集中力が持続するような工夫。70 分授業、30 分演習。
- ・1 年前期の授業数が多く負担が大きい。3 年間での授業のバランスをとる必要がある。1 年前期の科目を後期にずらして、負担の平準化をはかる。学年の後ろから最適化していく。
- ・受験の学びから大学の学びに移行する 1 学期とするカリキュラムにする。本当に必要なコアだけをやっておく。  
→自分の道を見つけること、教養、留学等を使って大学生のマインドを形成する時期にする。
- ・基礎科目など学ぶ量が適切なのかを再度考えてみる (授業科目の数、レベルなど)、教員間のコミュニケーションを深め体系的な学びの最適化を図る (科目間の融通)。⇒わかった経験ができるレベルと量にする。
- ・教える量が多すぎるのではないか⇒教えるアイテムを減らし残ったものを充実して教える。
- ・後期ガイダンスを後ろにずらし、学園祭の日程も変更すれば、学生の夏期休暇の期間を長く設定できる。まとまった時間の確保。
- ・定期試験前に 1 週間ほどの授業のない日程を組んで、学生が勉強をする時間を確保する。

## ▼その他

- 学生に時間の使い方を教える。
- 学生の海外派遣を増やすのであれば、学外実習 1 と合わせて実施してはどうか。
- 授業数が多いことの対策として、外部試験で単位の認定ができるものを増やしてはどうか（英語科目の TOEIC の様に。情報処理関係など。IT パスポート）
- 初年次の学生に対して学習への啓蒙を行う（週 1 ぐらい。ランチミーティングも）（受験期と同じぐらい勉強してほしい！）GW 過ぎた頃に、他大学の情報を入れてくるので、その頃に一度行くと効果的？
- 学生の能力の違いはあるので、それを理解したうえで学習をすすめることも教える必要がある。
- 「電磁気学 1 および演習」の授業で、授業で教えたことが、後で何に関係するか、教えると上位の学生には効果的。
- 寮生サポータの役割は重要。学問が面白い、と教えられるような学生に担当してもらえるとよい。
- 学生を交えた議論が必要（学生参画による大学運営）
- 文科省の方針に文字通りに従うと、教員や学生にさせることが多くなる。